伝為家筆「伊勢物語切」の新出断簡——紹介と本文の検討——

日本文学／准教授　岸本理恵

一、はじめに

藤原為家を伝称筆者とする伊勢物語について、『新撰古筆名葉集』には特に記載されないが、複数の写本や古筆切が現存している。その中には、流布するようになる定家本の系統とは大きく異なる面を見せるものも少なくない。これらは定家本の成立や性格を知る手がかりとなり、あるいは完本としては現存しない狩使本の姿を伝えるものがあるなど、伊勢物語本文を考える上で重要なものが多い。

このたび、このような為家を伝称筆者とする伊勢物語切の新出資料を調査する機会を得た。三紙を継いだもので一五行の分量もあり、ツレの断簡も複数確認できたので、ここに紹介するとともにその本文系統についても以下に考察する。

二、新出断簡の書誌と本文

ここに紹介する新出断簡は、聴松室蔵の古筆手鑑『精虔』に押された一葉（図版は本稿末に掲載）。三紙を継いだもので、大きさは、縦は二二・六cm、横は第一紙目一三・二cm、第二紙目一三・〇cm、第三紙目一・八cmとなっている。行数は、七行・七行・一行の計一五行。伊勢物語は四〇段の途中から段末までの部分。最後の一行をあえて貼り付けて段末までを一葉に仕立てたもの。手鑑には筆者を「為家卿」とする札が添えられているが、為家の真跡ではない。書写年次は後に紹介するツレも考え合わせて鎌倉中期頃であろうか。本文は次のとおり（行頭に行数と、適宜句読点を、途中の小丸数字は独自異文の印として付した）。

1　いまたおひやらす。人のこなれはと、むるいき
2　をひもなし。女もいやしけれは、すまふち
3　からもなし。さるあひたをもひはいやまさりに
4　まさる。にはかにおやこの女を、ひいつ。をとこは
5　ちのなみたをなかせとも、さふるよしも
6　なし。①さる程に、おとこなく〳〵よ②む
7　いとひてはたれかわかれのかたからむ
8　ありしにまさるけふはかなしも
9　とよみて、たえいりにけれは、をやあはてに
10　けり。なを思てこそいひしか、いとかくしもあら

11　しと思に、まことにたえ入たれは、願[3]たてけり。
12　今日のいり[4]あひのほと（はかりイ）にたえいりて、又の日の
13　いぬのときはかりに、いきいてたりける。
14　むかしのわかきひとは、さるすけるものをもひを
　　……
15　なんしける、いまのをきなさ[5]らにしなむや。

本文の系統は、通行の系統とは細かな点も含めると異同が多い。特に注目すべき異同は、七～八行目の和歌である。断簡は、

いとひてはたれかわかれのかたからむありしにまさるけふはかなしも

とあるが、多くの伊勢物語では、次のようになっている[1]。

いて、いなは誰か別のかたからんありしにまさるけふはかなしも

傍線を付した初句に「いとひては」と「いて、いなは」の対立がある。伊勢物語諸本の中では大島本[2]が断簡と同じく「いとひては」と書いたのを見せ消ちにより「いて、いなは」と訂正するほか、大島本と同系統の神宮文庫本・阿波国文庫旧蔵本・谷森本や塗込本も「いとひては」の本文をもつ。

さらに、この歌を他文献に求めると、尊経閣文庫本『在中将集』（私家集大成「業平Ⅰ」）や伝阿仏尼筆本『業平朝臣集』、『古今和歌六帖』（第四・わかれ・二三五六[3]）でも、初句に「いとひては」とあり、断簡と一致する。こうした状況から、片桐洋一氏が「「いとひては…」の方が古形である可能性は大きい[4]」とするごとく、古い本文を留めていることがうかがわれる。

その他にも、断簡一行目「人のこなれはと、むるいきをひもなし」は、大島本「人のこなれはと、むるいきをいなし」とあってほぼ一致するのに対し、定家本は「人のこなれはまた心いきおひなかりけれは、と、むるいきおひなし」と、傍線を付した一文が入る。一一行目「まことにたえ入たれは」は、大島本とは一致するが、定家本は「しんしちにたえいりにけれは」とあり、異同が見られる。

こうしたことから、断簡は定家本と対立して大島本に一致するように見えるが、必ずしもそういうわけでもない。断簡は一三行目「～いきいてたりける」として一話を終え、一四行目「むかしのわかきひとは」と続ける。しかし、大島本は「～いきいてたりける」に続けて、

女かへる人につけて、
　いつくまてをくりはしつと人とは、あかぬなこりのなみたかはまて

とありけるをき、てこそ、おとこはたえいりける

という女の返歌まで語った後に、「むかしのわかき人は」と続けており、断簡と対立する。この女の返歌は大島本のみでなく広本系とされる諸本に見えるものではあるが、本来は行間注記であったものが大島本のように段末に付加され、さらに本によっては男女の贈答歌として自然な位置へと移されていくものとされる。とすれば、断簡のようにこの歌を持たないのが本来の形ということになる。なお、通行の本にも女の返歌はない。

さらに、断簡はわずか一五行の間に、先の翻刻に小丸数字を付した五ヶ所に独自異文がある。定家本・大島本と比較すると次のとおりである。

①さる程に―定家本「ゐていて、いぬ」大島本「さてゐていてぬ」
②よむ―定家本・大島本その他諸本「よめる」
③願たてけり―定家本「まとひて願たてけり」
　　大島本「まとひつらをふき願たてけり」
④いりあひのほとに―定家本・大島本その他諸本「いりあひ許に」
⑤さらに―定家本・大島本その他諸本「まさに」

こうして見てくると、断簡は定家本等の通行の本と対立し大島本等の広本系と一致する傾向を見せるが、広本系やその他幾つかの本がもつ女の返歌は持たず、また細かな独自異文も少なくないものと言える。

三、新出断簡のツレと本文系統

聴松室蔵の新出断簡のツレとして、次の四葉を認めることができる。伊勢物語の該当箇所、大きさ（縦×横）、行数、伝称筆者、所蔵者および図版の掲載

誌の順に示す（以下に聴松室蔵断簡をAとし、順にB～Eとして断簡に記号を付す）。[6]

B 三九段・四〇段、二二・八×一四・三cm、七行、為家、久曽神昇『物語古筆断簡集成』（汲古書院・二〇〇二年）

C 二一段、二二・七×一四・五cm、七行、後鳥羽院(田原切)、小林強・高城弘一『古筆切研究　第一集』（思文閣出版・二〇〇〇年）

D 二二段・二三段、七行、為家、根津美術館「一号手鑑」

E 六九段、二二・八×一四・二cm、七行、為家、東京国立博物館（B-13）

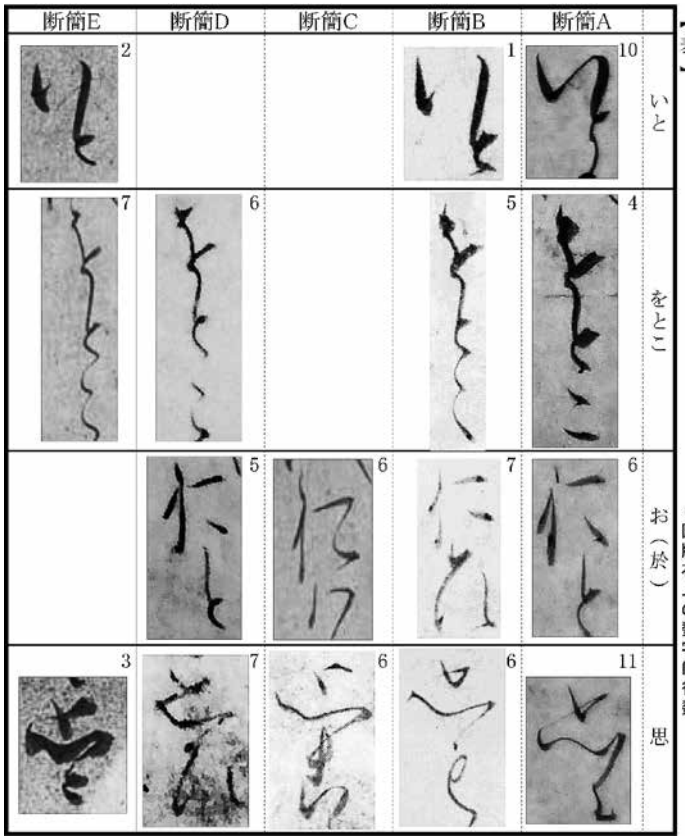
いずれも縦の大きさは二三センチ足らず、横幅は一四センチ程度。断簡Aに比べて一センチ程幅が広いのは、丁数を示した小字や綴じ穴が残るためである。[7]すべて一面七行詰めであり、大きさと行詰めにおいて一致する。

このうち、断簡Bは本稿末に図版を掲載したもの。後から二～三行目の下の部分に見える大きなシミが、断簡Aの三行目辺りの下や一二行目（第二紙目としては後から三行目辺り）下の部分にも同じく認められ、まさに同一の冊子から切り出されたツレであると確認される。しかも、断簡Bは伊勢物語三九段半ばから四〇段の冒頭部分で、聴松室蔵断簡Aに連続する。この二葉により、この本の伊勢物語四〇段に限っては完全に復原できることになる。断簡Bは右上に冊子本として綴じるために記されたと思われる丁数を記した小字と、丁の右側余白部分に綴じ穴が残るので、冊子本の状態ではこれが表、断簡Aがまさにその裏面にあったと判明する。

断簡C・D・Eの三葉は高城弘一氏によって既にツレと認定されている。[8]断簡Cは極札に「後鳥羽院　田はら切」とあり伝称筆者が異なるので注意される。断簡D・Eは、『古筆学大成』が伝為家筆伊勢物語切（一）として掲載するもの。うち断簡Eは東京国立博物館蔵の掛幅で、本稿末に図版を掲載したように、頁を大きく対角線で区切って三角形の図柄を丁字吹きで染めた印象的な料紙を用いる。しかも、染めて色付いた部分にはあえて文字を濃い墨で太く書くという装飾的な書写をしている。断簡Cも同じく丁字吹きで、こちらは篭目模様の料紙。一見すると断簡AやBとはツレと思えないが、大きさはほぼ同じ、断簡Bと同じく断簡D・Eには右上部の端に丁数を記した小字が残る。[9]

さらに各断簡の筆跡を比較すると、次の【表】のとおりである。

【表】



＊図版右上の数字は行数

「いと」の「と」を「い」の右下に小さく続ける様子は、この他に「ひと」等にも見える。「をとこ」の連綿の様子、「お（於）」や「思」の崩し方も特徴的で同筆と認めてよい。したがって、断簡A・BはC・D・Eに比べ料紙の装飾や流麗な筆遣いの点において一見異なるように見えるが、丁寧に比較すると全てツレと認定できるものである。

これら断簡Aのツレについて本文の系統も確認しておく。断簡が通行の本と大きく異なる点として、伊勢物語三九段の和歌（断簡B一～二行目）がある。定家本・大島本と併せて比較すると次のようになる。

いとあはれけにそかなしきともし火のきゆらんことも我はしらぬに　断簡B
いとあはれなくそきこゆるともしけちきゆる物とも我はしらすな　定家本
いとあはれけにそかなしきともしひのきゆらんこともわれはえしらす　大島本

第二句目、断簡B「けにそかなしき」は大島本の訂正前の本文に一致し定家本「なくそきこゆる」と対立する。しかし、一首が訂正前の大島本と一致するかというとそうではなく、断簡Bは第五句目「我はしらぬに」とあって定家本とも大島本とも異なる。大島本の他に広本系とされるものの一部には第二句目が断簡Bと一致するものもあるが、第五句目はやはり大島本の方に一致して断簡とは対立する。わずかに伝為氏筆鉄心斎文庫蔵本がこの第五句目を「われはしらぬに」として見せ消ち訂正前に断簡Bと同じ本文を持つが、第二句目は「なくそきこゆる」とあって定家本の方に一致する。つまり、断簡Bは第二句目は広本系のもとの本文に一致するが、第五句目はいずれとも異なり、一首としては定家本とも大島本とも異なる本文を持っているということである。

同じく伊勢物語三九段の段末部分（断簡B四行目）、三本は次のような対立を見せる。

いたるは順かおほち也　断簡B
いたるはしたかふかおほち也、みこのほいなし　定家本
いたるはしたかふのおほちなり　大島本

定家本が持つ「みこのほいなし」を、断簡Bと大島本は持たず二本は一致する。

もう少し詳しく検証してみよう。伊勢物語六九段（断簡E六～七行目）では、

あけなはおはりのくにへたちぬへけれは、をとこも女も人しれすちのなみたを　断簡E
あけはおはりのくにへたちなむとすれは、をとこも人しれすちのなみたを　定家本
あけはおはりのくにへたちぬへけれは、おとこも女も人しれすちのなみたを　大島本

とあり、傍線を付した三ヶ所で断簡は定家本と対立する。このうち①は独自異文、②③は大島本と一致して概ね大島本に近いようである。この断簡Eについては複数の辞典等に紹介され、「通行の定家本とは異なり広本系統のそれである」と既に指摘がある[10]。他に伊勢物語一二段の段末（断簡D三行目）でも、歌の後に定家本をはじめ多くが「いにしへよりもあはれになむかよひける」との一文を持つが、大島本など広本系諸本はこれを持たず、断簡と同じく「秋の夜のちよをひと夜になせりともことはのこりて鳥やなくらん」の歌で一段を終えるので、断簡は広本系に大きく一致する。しかし、この一文は、広本系のみでなく塗込本や高野本、永享十一年正徹本もまた持たない。また、断簡E一行目「かりにいてぬ」（六九段）は、大島本を始め広本系諸本の「かへりいてぬ」と対立し、断簡は定家本と一致を見せる。よって、断簡は定家本と対立する部分において大島本と一致する傾向を見せる場合が多いが、必ずしも大島本と一致するものでもなく、定家本と一致する場合や独自の本文を持つ部分もある。ここに図版を掲載しなかった断簡C・Dについても概ね同じ傾向で、このたび紹介する聴松室蔵の断簡Aも、先に確認したとおりそのような傾向であった。

四、まとめ

以上、新出の断簡Aが『古筆学大成』伝為家筆伊勢物語切（一）二葉のツレであり、さらに『物語古筆断簡集成』に紹介される一葉も同じくこのツレであると認定し、全六頁分を集成できた。丁字により図柄を染めた料紙のもの（断簡C・E）がある一方で、その他は素紙であることから、もとは装飾のある料紙と素紙を交用した冊子本であったことがわかる。またその本文も六葉を集成したことで少し明らかになった。すなわち、定家本と異なる点が多く、その多くは大島本と一致する傾向にあるが、、現存する六葉のうちにも大島本とも大きく異なる点もまた持っており細かな独自異文もある。鎌倉時代の多様な伊勢物語本文の様子を伝える貴重な資料と言えよう。

〈注〉

（1）通行の系統の本文として、学習院大学日本語日本文学科蔵の三条西家旧蔵伝定家筆本を『伊勢物語校異集成』（加藤洋介編・和泉書院・二〇一六年）本文篇により挙げる。なお、以下にこれを通行の本文の例として「定家本」とする。

（2）国立歴史民俗博物館蔵伝為氏筆本（旧大島雅太郎蔵本）を以下に「大島本」とする。本文は『国立歴史民俗博物館蔵　貴重典籍叢書　文学篇　第十六巻〈物語1〉』（臨川書店・一九九九年）による。

（3）ただし、『古今和歌六帖』は第五句「けさはかなしも」とある。

（4）片桐洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院・二〇一三年）第四〇段の項。

（5）林美朗「伊勢物語書本論とその本文」（王朝物語研究会編『論叢　伊勢物語1　本文と表現』・新典社・一九九九年）

（6）この他、小林強「出典判明仮名散文関係古筆切一覧稿」（『人文科学』一二・二〇〇七年三月）には、伝後鳥羽院筆田原切として伊勢物語一二段部分の断簡が挙げられているが、図版等を確認できていないのでここには挙げなかった。なお、断簡B～Eそれぞれの図版は、次の書籍にも掲載がある。

B 春日井道風記念館図録『国文学と古筆』（二〇〇四年）

C 出光美術館図録『平安の仮名 鎌倉の仮名』（二〇〇五年）

D『古筆学大成』伝為家筆伊勢物語切（一）7、高城弘一『古筆切研究　第一集』

E『古筆学大成』伝為家筆伊勢物語切（一）8、高城弘一『古筆切研究　第一集』。東京国立博物館画像検索に画像がウェブ公開されており、掲載の図版はこれによる。

（7）ただし断簡Dは、図版では丁数の表記や綴穴は確認できない。

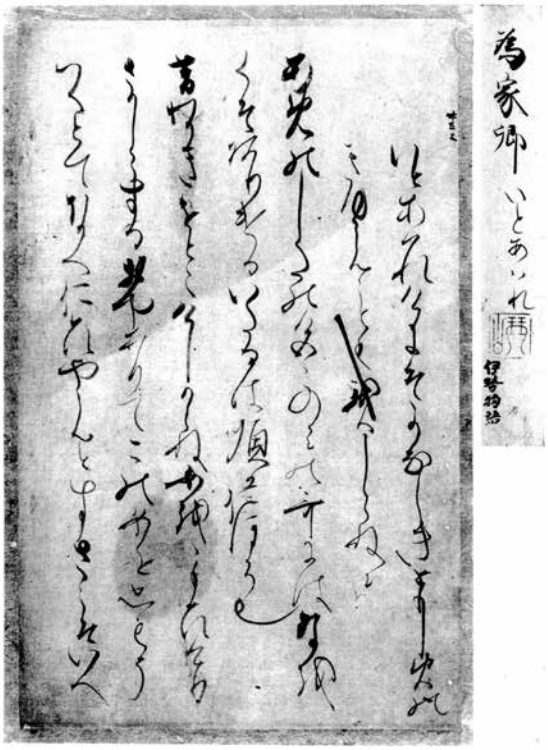
（8）断簡Cを紹介した高城弘一氏の『古筆切研究　第一集』（思文閣出版・二〇〇〇年）。

（9）断簡Aは第一紙・二紙とも各七行ながら他の断簡と比較して一紙分の横幅が一センチ程度短いのは、この部分を切断したためであろう。

（10）『日本古典書誌学辞典』（岩波書店・一九九九年）、「伊勢物語切（伝為家筆）」の項。

〔付記〕資料の閲覧にご高配賜り、図版の掲載を許可くださいました方々および諸機関に厚く御礼申し上げます。なお、本稿はＪＳＰＳ科研費（16K02370）の助成を受けたものです。

断簡A（聴松室蔵古筆手鑑『精虔』）



断簡B（『物語古筆断簡集成』）

断簡E（東京国立博物館蔵）